

顔面奇型の子供をもつ母親への援助

〈疾患別オリエンテーションの再検討〉

北3階病棟 発表者 矢崎 照子

今野 弘恵・百瀬 領子・中村 君枝・北島 由美子
五十嵐 すみ子・野村 明美・小松 哲子・野島 節子
宮本 ひさ子・細田 かず子・布野 美代子・浅川 葉子
広瀬 すま子・藤原 明美・小林 美保子

I はじめに

医学の発達した今日でも、奇型児の出生率は依然として500～600例に1例の割合にみられる。多指症、臓器奇型等多種ある中で、口唇裂並びに口蓋裂、小耳症など頻度の高いものとしてあげられている。当形成外科においても過去一年口唇裂54例、口蓋裂26例、小耳症13例が手術の目的で入院して来ている。人並でない患児をもった母親の苦悩は計り知れないものがあると思われる。手術をすれば本当にきれいになるか、言葉が普通に話せるか、聴えの点等、母親のもつ不安を軽減できるよう、アンケート調査を基に、今迄のオリエンテーション用カードに改善を加え、しおりを作成し使用を試みたので、その経過を報告する。

II 看護目標

母親のもつ心理を理解し、不安、悩みを少しでも軽減できるよう援助する。

III 問題点

- (1) 対象である患者が、理解力を持たない乳幼児であるという意識に欠け、母親の気持に対する配慮がなされていない。
- (2) 現在用いているオリエンテーション用カードの内容は、麻酔や手術にのみ重点をおいたものである。
- (3) オリエンテーションの方法もまちまちで、大部分はカードを渡し説明のみにとどまっていた。

IV 対策

1. アンケートの作成

奇型児をもつ母親の心理を知るために、アンケート調査を行う。

アンケート作成に当っては、母親が最も気にしていると思われる次の項目に留意した。

- 母親自身のもっている病識、遺伝について
- 奇型児であることを知らされた時期
- 発育段階での機能的障害について
- 家族又は周囲の偏見に対すること
- その他

〈アンケート調査内容〉

- (1) 口唇裂、口蓋裂、小耳症という奇型があるということを知っていましたか。
- (2) 遺伝に対する心配がありますか。
- (3) 出産後異常を知らされた時期、またその時の心境はどうでしたか。

- (4) 患児が生まれ最初に心配したことは何でしたか。
- (5) 世間の目に対して、どの様にしてきましたか。
- (6) 身内へ対する気遣いはどの様なことでしたか。
- (7) 家族よりの思いやりはどの様な形で表わされましたか。
- (8) 心の支えになってくれた方はどなたでしたか。
- (9) 子供へのしつけに対してどの様にしたいと思いますか。
- (10) 子供からの質問に対してどの様に話しますか。
- (11) 母親のおかれている地域、環境、背景、風習について。
- (12) 妊娠中原因かと思う様なことがありましたか。
- (13) 子供の将来についてどの様な考えを持っていますか。
- (14) 入院して同じ奇型をもつ子供がいた時どの様な気がしましたか。
- (15) 親子心中について（話をしている中でくみ取る）
- (16) 全体を通じ母親より感じ取ったこと。
- (17) 術後の感想

2. アンケート調査

調査期間 S54年9月1日～55年1月31日迄

対 象 口唇裂8例、口蓋裂8例、小耳症7例、計23例

方 法 疾患別に受持を決め入院時面接方式で行ったが、入院直後であること、手術前ということで、母親には二重の不安があり、面接中に泣き出し、スタッフ側もついもらい泣きしてしまうような場面がみられたので、検討の結果手術終了後5日～7日経過が安定し、母親の気持の落ちついた時期を選んで行うことにした。尚術後の感想についての項目も付け加えた。

3. 調査結果

- (1) 疾病に対して自分の子供で初めてこのような奇型があることを知った。
口唇裂、口蓋裂各6例、小耳症5例
- (2) 遺伝に対する心配をもっているもの。
口唇裂、口蓋裂各5例、小耳症3例
- (3) 異常を知らされた時期。
口唇裂、口蓋裂共に出産後、翌日～5日以内夫、又は母親から知らされた、13例
◦ 哺乳時に自分で気づいた。小耳症のみ6例
◦ Dr より知らされた。1例
- (4) 大変な子供を産んだとショックだった。
23例中22例
- (5) 機能的なことについて
◦ きれいに治るかどうか。口唇裂5例
◦ 哺乳をどうしたら良いか。口蓋裂1例
◦ 言葉がはっきり話せるか。口蓋裂3例
◦ 聴えるかどうか。マスク、眼鏡が必要になったらどうしよう。義務教育が受けられるか。
小耳症のみ4例
- (6) 外見的なこと
◦ 世間の目を気にして外に出さなかった。
口唇裂4例、口蓋裂・小耳症各2例

- 外へ出るときはテープを貼った。口唇裂 4 例
- 見えないので特に気をつかわなかった。口蓋裂 4 例
- 髪の毛や帽子で隠していた。小耳症 2 例

(7) 術後の感想

- 術前は小さい子供が長時間の全身麻酔に耐えられるだろうか心配だった。
- ほんとうにきれいに治るだろうか。
- 絆創膏がとれたり抜糸の時が心配だった。

などアンケートをまとめる中で、スタッフ側が疾患と遺伝について正しい知識をもち、母親に接する必要があると考え、疾患別に担当を決め勉強会を基にしおり作成への足がかりとした。

V しおり作成

- (1) 今迄使用していた術前術後のオリエンテーション用カードは、麻酔や手術のみに重点をおいたものであって、活用方法もまちまちで大部分はカードを渡し、説明のみにとどまっていた。手術をすれば本当にきれいに治るか等、アンケートからの母親のもつ不安を少しでも軽減できるよう、今迄のカードを改善し口唇裂と小耳症に対しては写真を添え、術後の治癒の状態が一目でわかるように工夫した。

しおり一部紹介

＜唇裂形成術を受けられる方へ＞

1. 手術前に気をつけたいこと。

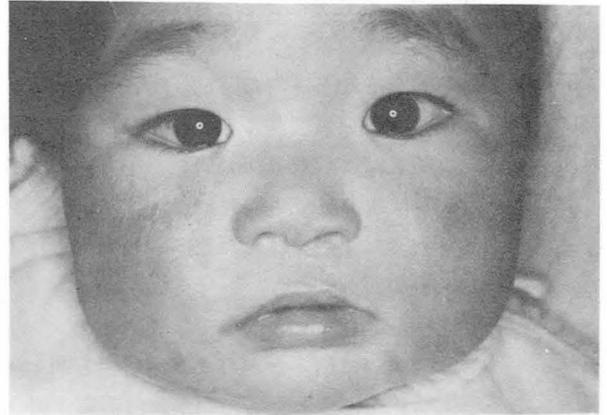
乳児では、環境の変化から哺乳状態が低下し、脱水・発熱による手術延期がしばしばみられます。

- 家庭にちかい哺乳環境を作り、充分ミルクを与えましょう。
- 風邪を引かせないように気をつけましょう。

2. 手術をすればこんなにきれいに治ります。



術 前



術 後

3. 手術直後気をつけたいこと。

1) 出血時の注意

術後鼻や口から血液が流れ出ることがありますが、口にたまった血液はのみこまないように、枕をしないで顔を横にむけてはき出させて下さい。口や鼻に血液がたまりますと呼吸が妨げられます。口や鼻が血液ででいぜいしたり、出血が多い時はすぐ知らせて下さい。

2) 抑制リングの使用

鼻や口到手をもっていかないように、入院中は抑制リングをはめます。時々はずして気分転換をはかってあげましょう。

3) 栄養について

- ・術後医師または看護婦の許可があるまでは、水分・ミルクは与えないようにしましょう。
- ・胃や腸の働きが正常にもどる迄状態に応じて、水分は少しずつ段階的に与えます。(最初はスプーンで少しずつ与え、何もなければ哺乳ビンで飲ませてかまいません。)
- ・水分が不足しますと脱水状態になりやすく熱が出たり、合併症を併発しやすいので、根気よく何回にも分けて飲ませる必要があります。
- ・ミルクが充分な量飲めるようになるまで、飲んだ量と時間を記入しておいて下さい。

4. 抜糸と絆創膏固定について

抜糸は術後4日目頃より行います。傷あとをきれいに治すために、他の部の手術より早目に行います。抜糸がすんだからといって安心しないように、こすったり、物にぶつかけたりしないよう注意して下さい。傷をきれいに治す目的で抜糸後も当分の間絆創膏を貼りますが、貼り方はがし方は多少傷跡に影響しますので次のような方法で行って下さい。

貼り方：縫合部を両側からよせるように貼りましょう。

はがし方：左右から少しずつはがし、縫合部の真上から下へ傷と平行にはがしましょう。

※絆創膏は肌色テープで当院の売店で販売しております。

5. 退院後気をつけたいこと

傷は5日目頃が一番赤味がつよく段々に薄くなります。また5週間頃が傷が最も硬くなります。

- 1) 絆創膏は手術後少なくとも6週間は貼るようにしましょう。
- 2) 直射日光に当たると黒くなることがありますので、直射日光にはあてないようにしましょう。
- 3) 転倒したり患部を強くぶつけると傷が離れることがありますので、少なくとも手術後2週間は転倒したり、ぶつかけたりしないよう気をつけましょう。
- 4) 癬痕が強く残ったり、鼻の形がおもわしくない等不満足な部分がありましたら就学前、あるいはもっと大きくなってからでも修正手術ができますので医師と相談して下さい。

(2) 実施

しおりを使つてのオリエンテーションは、手術について必要なことを出来るだけ早く知ってもらい、余分な心配や不安を少なくする目的で入院時アナムネーゼ聴取のとき一緒に行った。アンケートの中から得た母親の心理を十分に理解しながら、不安を増強させるような説明はさけるように配慮した。例えば、遺伝については決定的なものはなく、その頻度もごく少数であることから、母親の質問があった場合のみ説明するようにした。

実施例の紹介

性別	男	生後5ヶ月	疾患	口唇裂
家族構成	父32才	職業	教員	
	母28才	職業	音楽関係	
背景	伯父には、医師、教育者が多い。			

母親は身内に医師がいたこともあって、外見的なことや手術についてある程度知っていたため現在の医学を信じ医師にまかすと受け入れていた。併し入院により同患児をみて、我子だけではないと安堵感をもった反面、出生率の高さに恐怖感をいだき、孫に遺伝したら困るとの動

揺がみられた。奇型の原因や遺伝の出生率について説明すると、「とにかく一生懸命みてやりま
す」と落ちつきをとりもどした。写真をみて「こんなにきれいになるんですねえ」と表情も明
るくなり、安心して手術に望むことができた。

VI 評価考察

アンケートについては、内容がやや抽象的であり、スタッフのとらえ方にもずれがあり、総体的に
まとめることはむずかしいが、傾向としてアンケート結果よりわかるように、精神的には口唇裂の方
がなるべく外に出さず隠していた。身内には話したが他人には隠す。自分に責任があると話された母
親もあり、他の疾患に比較するとかなり深刻になっているようである。しかし機能面からみると口蓋
裂の程度のひどいものは、手術しても構音障害を残し子供の成長にも影響があるので、母親が正しい
知識をもつ必要性を感じる。アンケート聴取の時期は入院時母親の心理を深く考えず行なってしまっ
たが、術後母親の気持の安定した時に変更したのは、子供に対し客観的な見方ができアンケート調査
にプラスになったと思われる。

今迄の疾患別カードは、手術と麻酔に重点がおかれ母親の精神的援助に欠けていたが、今回のしお
りにより術後の出血、食事のすすめ方、抜糸の時期、術後の状態など一目でわかり理解しやすくな
ったと思われる。しおりを作成する中でスタッフ内の知識も高まりしおり内容だけでなく、母親の質問に
も自信をもって応じることができるようになった。

VII おわりに

小耳症においてはアンケートのみで、しおりを使つての実施例がなく母親より感想が得られず残念
に思う。今後このしおりを活用し援助してゆきたい。奇型というハンディーをもつ子供の母親として、
厳しい社会の中を勇気と自信をもって育てていって欲しい。この研究にあたり形成外科の先生、患者
さんの家族に深く感謝いたします。参考文献は略させていただきます。